

条件表現史上の「理屈っぽい」表現

きたざき ゆうほ
北崎 勇帆 (高知大学)

1 はじめに

1.1 前回のあらすじと振り返り

👉 前回のあらすじ

🎯 博論までの話

- 👉 命令から条件へ(機能のレベル)
- 👉 対人的形式(意味)の非対人化(一般化された意味レベルでの変化)

🎯 博論以降の話

- 👉 推量形式の従属節でのふるまいをメインに
- 📖 [第1回川島拓馬を囲む会「日本語の文構造と意味変化」](#)

👉 前回のやってたこと・やりたかったことリストの振り返り

👉 やってたこと

🎯 a. 「貸しましょうから、読んでみな」のような、意志のウの生起

- 📖 [「中世・近世における従属節末の意志形式の生起」『日本語の研究』17\(2\) \(2021.8\)](#)

🎯 b. ホドニ・ガ節への推量形式の取り込み

- 📖 [「意志・推量形式の従属節への取り込み」『中部日本・日本語学論集』和泉書院 \(2022.1\)](#)

🎯 c. 意味変化の話の一般化(→上の資料の4.5)

- 📖 [「意味変化の方向性と統語変化の連関」『日本語と近隣言語の文法化\(仮\)』ひつじ書房 \(2023には…\)](#)

🎯 d. 近世における従属節の階層性

- 📖 [「近世における従属節の階層性」『コーパスによる日本語史研究 近世編』ひつじ書房 \(2023には…\)](#)

👉 「やりたい」と書いたこと

🎯 a. 「開いた」「閉じた」の再検討→上のcに少し吸収されて、ちょっと満足した

🎯 b. 階層構造の歴史の一般化

- 📖 [「原因・理由と話者の判断」『日本語文法史研究6』ひつじ書房 \(2022.11\)](#)

👉 他にやってたこと

🎯 形容型接尾辞系と終助詞系の2種の希望表現について

- 📖 [「希望表現の史的変遷—願望を中心に—」『コーパスによる日本語史研究 中古・中世編』ひつじ書房 \(2022.10\)](#)

- 👉 終助詞系(もが・ばや)と形容詞系(まほし・たし)の2系列が文末・文中で分担していたのが、近代語では形容詞系が両方を担うようになったことを中心

的な主張としつつ、

👉 その過程において、条件表現、待遇表現などについては、終助詞系もアドホックな方法を用いてその機能を表し得ていたことを述べた。

- (1) a. まゐり来まほしけれど、つつましうてなむ。(蜻蛉日記上・20- 蜻蛉 0974_00001,59480)
b. …と告げ知らせまほしくはべれど、月ごろ隠させたまひける本意違ふやうに、もの騒がしくやはべらむ。(源氏物語・夢浮橋・20- 源氏 1010_00054,23800)
- (2) a. ^[中将→母尼]「…今宵 [東琴を] 聞きはべらばや」とすかせば、(源氏物語・手習・20- 源氏 1010_00053,150480)
b. ^[紀伊守→尼君]「…女にて [兵部卿宮に] 馴れ仕うまつらばやとなんおぼえはべる」(源氏物語・手習・20- 源氏 1010_00053,288220)

🎯 これは一応、「述部の構造に時代的な異りがある」ことの主張でもある。

👉 資料研究。近代に古典を口語訳した「新訳」について(狂言記に引き続き)。こういう余技的なやつは楽しいし、結局メインの論文にも生きてよかった。(あと、授業でも手元のワーク的なやつにめっちゃ使えてラッキー)

📖 [「近代に口語訳された三種の梅暦」『近代語研究 22』武蔵野書院 \(2021.3\)](#)

1.2 今回の話に至るまで

👉 上のテーマの一つの総括として、原因・理由節について、以下の3つの予測を立てた。

- (3) a. 推量を含まない→含み得るという拡張が一般的。
b. ノデ・カラ的な機能の分担は、共時的に切れればそう見えるというだけで、必然的な分担ではない。
c. 一文中で節を繋ぐ以外に、文の接続という方法があるかもしれない。

👉 ここからの学びとして、

🎯 一般的記述に寄せられそうな記述 (e.g. 「複数形式で分担」) や要因 (e.g. 「棲み分け」) を想定するとき、その一般性をもっと考えた方がいい段階に至っているのかもしれない？

🎯 我々が大学院に入るちょっと前くらいからの潮流の影響で、「それっぽいストーリーがある」ことを前提としすぎているような気がする？

🎯 発足メンバーがたまたま (必然的に?) みんな、位相差・文体差まで含めて考えているので、後述する科研に申請 (2022/9)

👉 そんなことを踏まえつつ、原因・理由表現にまつわる現象として、考えていることをいくつか話します。

🎯 「なぜかという」とのような不定語疑問文の主題化

🎯 「(結果) は (原因) からだ」型

2 不定語疑問文の主題化

👉 もう少し詳細なデータはこちら

📄 [「抄物コーパス」の構築とコーパスを応用した日本語史研究」2022年度第1回研究発表会 \(2022/12/3\)](#)

2.1 問題の所在

👉 不定項（この例では「院政期を中世に含める理由」）が話し手にとって既知である場合に、不定語疑問文をトイウ節に埋め込んで主題化することで、説明の要求を聞き手に対して行わずに話し手自身が説明する表現を構成することがある。

- (4) a. 「{どうして／なぜ} 院政期を中世に含めるんですか?」「この頃に古典文法らしさが崩壊し始めるからです」
b. {どうして／なぜ} 院政期を中世に含めるのかと {いうと／いえば}、この頃に古典文法らしさが崩壊し始めるからです。
c. ({どうして／なぜ} 院政期を中世前期に含めるのか?) なぜなら、この頃に古典文法らしさが崩壊し始めるからです。
d. ({どうして／なぜ} 院政期を中世前期に含めるのか?) その理由は、この頃に古典文法らしさが崩壊し始めるからです。

👉 まず、以下の点が問題となる。

🌀 (4b,c) のタイプが中古和文に認められないこと。

🌀 以下 (5c,d) のような、現代語と完全には可換でない構文があること。

- (5) a. 學而已下ノ二十扁ハ小目也。ナセニ學而ヲ以テ第一ノ扁ニ置ソト云ニ、人ハ學問ヲシテ舜何人ソ吾何人ソト云所ニ至ヘシ。(応永本論語抄・学而第一 [1420] 27-8)
b. 傳と云はをごつたぞ。なぜになれば、理運に師より傳來したと云ほどにぞ。(毛詩抄・卷1 [1539] 5-2)
c. 何として知ぞならば、其國の風土を譽つ、そしつゝして、歌を作て歌ふ程に、其を以て知ぞ。(毛詩抄・卷1 [1539] 6-1)
d. 何の因縁を以てぞ、諸の行法を説ケども、去來有(る)こと無キとならば、一切の法は體において異なること無キに由ル故になり。(以何因縁説諸行法無有去來由一切法體無異故)(金光明最勝王經古点・卷4 [830頃] 74-9)

👉 加えて、(4c) のような接続詞も含めてこの表現の歴史を考えると、「～という」という場合には不定語の種類に制約がないのに対し、接続詞の場合には理由を問う疑問文に限定される。

- (6) a. どこに来ているかという、ピューロランドに来ています。
b. *どこなら、ピューロランドに来ています。

- 高橋(1999)などで指摘されているように、この表現は論説文に現れやすく、「話し言葉」であってもスピーチスタイルに制約がある(→大江ほか2020の「独演調談話」?)。疑問文の体系から見れば周延的な構文であり、個別の接続詞の成立の研究として見ればやはり落穂拾い的であろうが、この点、わざわざ取り上げる理由がある。
- (7) a. 川端がこのように意味不明のことを書く理由は何かと言えば、やはり、すぐ後の(ハ)で示される「動詞終止形+と」へと繋ぐためだろう。(辻本桜介「古代語引用助詞研究の諸課題」『日本文芸研究』74(1))
- b. [娘の幼稚園受験について] じゃ次はどうかと思ってあのーいたところ そのずとこの試験ではあのー先生がくまのプーさんをあのーTシャツ着てたんですくまのプーさんがとても好きで えーなぜかと言うと この妹があの一くまのプーさんが好きでそのーものをばかりおもちゃばかりをくれたんで えー本当プーさんが好きになっててそれを見てあの一一緒に遊びに付いて行っちゃったんで すよ で勿論合格でした(CSJ・独話・模擬・S01M0706・35290)
- 以下の分類を設けて調査する。埋め込まれる疑問文の種類については(6)の観察に基づき、動詞・形容詞を述語とする場合と不定語を述語とする場合(于1996の「述語用法」)の2類に分けておく。
- (8) a. 発話動詞型:[疑問文] ト+発話動詞の条件形…(4b)(5a)
- b. トナリ型:[疑問文] ト+ナリの条件形…(5d)
- c. ナリ型:[疑問文] +ナリの条件形…(4c)(5b,c)
- d. 語彙的な主題化…(4d)

2.2 用例概観

2.2.1 上代・中古和文

● 上代にはトナリ型が1例のみあり(辻本2017)、中古和文には発話動詞型の、明らかに訓読文的な例が1例のみ。次の訓点資料での観察とあわせて、「理由は」型のみが日本語固有であると考えられる。

- (9) a. 何を以(ち)てか知(る) とならば〈何乎以天可知止奈良方〉志愚に心善(か

1 ただし、学術論文ではそれほど使われないように思う(情報伝達がどれくらい一方的であるかが効いている?)。なお、学術論文にはY/N疑問を用いた、「[直後に否定される見解]か」というと、「[見解の否定]」という表現が頻出する。これはこれで面白そうなテーマである。

- ・ ただし、この帰結について金田一が全く考えていなかったことかという、必ずしもそうとはいえない可能性がある。(大木一夫「不変化助動詞の本質、統制」)
- ・ しかし、当時の口語を考えるうえで、狂言がまったく問題のない資料かという、そうともいえない。書記されている時点ですでに一定の規範的な型を持っていたであろうことが想定される。(森勇太「中世後期における依頼談話の構造」)
- ・ ただし、こうした状況下であれば常にジャが使用可能かという、必ずしもそうではない。(上林葵「関西方言における終助詞的断定辞「ジャ」の機能」)

2 「どちらかという」と類だけは例外的に、一般的な対話にも現れる。成立が遅く、機能としても不定項の説明というよりは「選択説明」(安部2011)に用いられるものである、本発表の分析からは除く。しかし、これはこれで面白そうなテーマである。

ら) ずして天下を治(むる)に足(り)ず。(続日本紀宣命・33 詔 [765] 10- 宣命 0797_26033,2860・辻本 2017: 13)

b. 仏現はれてのたまはく、「…また、この日の本の衆生は、生々世々に人の身を受くべきものにあらず。その故はいかにといへば、前の世に淫欲の罪はかりなし。…」(うつほ物語・俊蔭・36-5)

c. 督の君、さすがにあはれにて、……『しばし』と制しはべりしなり。その故は、西の方に住みはべりしより、時々忍びてまかり通ひて、時々見はべりしに、御けしきも、異御子どもよりも、こよなく思しおとされたりき。(落窪物語・20- 落窪 0986_00003,106810)

2.2.2 中古漢文訓読文

🟡 訓点資料にはトナリ型と発話動詞型の例があり、トナリ型が多い。³

🟠 「何者」等を「ナントナラバ」「ナントナレバ」と訓ずるのも、訓讀特有の語形であらう。古くは、「…ナラバ」「…ナレバ」の両例があつたやうである。」(築島 1963: 448)

(10) a. 何の因縁を以てゾ、諸の行法を説ケども、去來有(る)こと無キとならば、一切の法は體において異なること無キに由ル故になり。(以何因縁説諸行法無有去來由一切法體無異故)(金光明最勝王經古点・卷 4 [830 頃] 74-9)

b. 何(ぞ)甚深と名(づけむ)とて「イ、ル(と)イハムト」云(はく)二乗不知(と)いへり。若(し)初の解に依(りて)いはば、所以(は)[者]何 [(いか)]に(と)いは(ば)、所得の解脱は三乗同(じ)なりと雖(も)、般若と法身との相性の智慧をば、彼が得未(る)所なり。(何名甚深。云二乗不知。若依初解。所以者何。所得解脱三乗雖同。般若・法身。相・性智慧。彼所未得。)(妙法蓮華經玄賛淳祐点・卷 3 [950 頃] 161-17)

2.2.3 中世前期・和漢混淆文

🟡 トナリ型と発話動詞型が見える。トナリ型は話者に偏りがあり、発話動詞型は軍記には安定して見られる。「云」字がない」という原漢文の制約を受けない環境で、それが引用句であることを明示する方法として好まれた(?)と考えればよい?

(11) a. 汝ぞ、法花ヲ棄テ、最勝ヲ可持シ。其ノ故何(いかに)トナレバ、最勝ハ甚深ナル事余經ニ勝レ給ヘルニ依テ、最勝王經トハ云也(今昔物語集・13-40・30- 今昔 1100_13040,1790)

b. 兵衛佐宣ケルハ、「…来八月十五日以前ハイカニモ思立ジト思也。其ハイカニト

3 ただしこれは付訓のある例に限った場合で、そもそも付訓がないのが一般的。従属節として埋め込まず、疑問文と後続文の二文で示したものが。

・ 所以者何、一切の法は、自性空なり。(所以者何一切法自性空)(石山寺本大智度論・卷 61・18-15 [858] 628-10)

・ ちち、はるかにこれを見て、つかひにかたらひていはく、「…また、くみしかたることなかれ。」ゆへはいかん。ちち、そのこ、志意、下劣なることを知れり。(父遙見之。而語使言。……莫復與語。所以者何。父知其子志意下劣。SAT: T0262_09.0016c29-0017a03)(妙一記念館本仮名書法華經・卷 2・310-1)

イフニ、今明謀反ヲ発シテ合戦ヲスルナラバ、諸国ニ被祝（いははれ）マシマス、八幡大菩薩ノ御放生会ノ為ニ、定テ違乱トナリナムズ。」（延慶本平家物語第二末・493-14）

2.2.4 中世後期

👉 抄物では、トナリ型は少なく、発話動詞型が一般的に見られる傍らで、ナリ型が新たに現れる。

- (12) a. ○知者動——知者ハナセニ水ヲ樂ムソト云ニ、常ニ我智恵ヲ憎（ママ）長セントテ、心ヲ動瑤スルコト、水ノ流動スルカ如也。
○仁者静——仁者〈ハ〉ナセニ山〈ヲ〉樂ソト云〈ニ〉仁者〈ハ〉其心ノ閑ナルコト、山ノ不動カ如也。（応永本論語抄・雍也第六・292-7）
- b. 其ヲハ何トシテ注スソナレハ、論 - 談決 - 択擇シテ注スニ依テ論ト云也。（応永本論語抄・学而第一・9-2）
- c. 雉鳩はみさごの事ぞ。水鳥では無^{ナイ}ぞ。なぜになれば、かけつめが無ほどにぞ。（毛詩抄・卷1・27-7）

👉 キリシタン資料・狂言でもトナリ型は活発ではなく、かつ、発話動詞型・ナリ型も含めて全体的に現れにくい。この「説明」そのものが資料の性質に制約を受けるようである。

- (13) a. かの獣の我に教訓を成いた：それを何ぞと言うに〈nanzoto yūni〉、汝向後御身の様に大事に臨うで見放さうずる者と知音すなど。（エソポのハブラス 471・40-天伊 1593_00033,2430）
- b. 「かやうに候者は、周の武王に仕へ申官人にて候、誠に此君賢王にてましますにより、しよこう民百性に至るまで、此君をあがめたてまつる、それをいかにと云ふに、殷の紂王の御まつりごと散れ、悪ぎやくぶたうを巧み給ひ、諸侯国土のたみ百性の訴へ、憂申事をきこしめしいれられず候程に、萬民の惱是にすぎず候、（虎明本・武王・40-虎明 1642_08002,780）

2.2.5 近世以降

👉 発話動詞型は引き続き用いられ、これはそのまま現代語に至ったものと考えられる。ナリ型は一般的に口頭語資料とされるものでは隔絶するが、国字解、心学道話などにはよく見られる。

- (14) a. 御当地は芋所か。一生の見始め大坂で見世物にいたしたら、錢銀の掴み取り第一お家の吉相。なぜと申すに今日は殿のお成り、旦那の御出世、追つ付け山の芋から鰻におなりなされう（心中宵庚申・51-近松 1722_21001,25740）
- b. ちやうちんに女郎をかく事、火にたゝるずいさうなり。それをいかにと云に、女郎ハやく物じや。かさねてハ幽霊をかけとおほせられた。なぜになれば、きゆる物じやといふ。（軽口ひやう金房 [元禄末] 266）
- c. [自当逢雨露行矣慎風波] 追付都に、めしかへさるゝであらうほどに、苦しやるな、なぜなれば結構な御代で、雨露の御恩徳が、ふかいによつて折角息才で、

風波を慎で、身を大切にしてくださいと、なくさめてやる、(唐詩選国字解・巻3・東洋文庫405・p.314)

- d. 是でよう御合點をなされませ。一たび本心を見覺えますると、其あとから、少し斗の身鼻肩身勝手が出来ても直に知れる。なぜなれば、本心のあきらかなる、無理のない事を見覺た故、ちよつとでも無理らしい事は、中々うけつける物ではござりませぬ。(鳩翁道話・2上・東洋文庫154・p.24)

👉 ここまでざっくりまとめ。

表1 不定語疑問文の主題化概観

	発話動詞型	トナリ型	ナリ型	理由ハ
中古和文	△	×	×	○
中古訓読文	△	○	×	○
中世前期	○	○	×	○
中世後期	抄物 ○	○→△	○	○
	キリ・狂 ○	△	△	○
近世以降	○	×	○	○

- 🌀 理由を説明する表現のうち、「不定語疑問文の主題化」は漢文訓読によって日本語に定着したと考える。
- 🌀 発話動詞型は、トナリ型が既にあることを前提としつつ、発話動詞によって引用句であることを明示することが、原漢文の制約を受けない和漢混淆文で好まれたものか？
 - 👉 この頃はまだトナリが用いられるので、「トナリの衰退に伴う」という見方は採らない。
- 🌀 ナリ型は、ナリの用法拡張(小林1979、矢毛1999)を前提としつつ、これら発話動詞型・トナリ型と何らかの関係を持つ形で成立し、抄物で多用されたものと見る。
- 🌀 このうち、理由を問うものだけが固定的に、接続詞「なぜなら(ば)」として用いられるようになる。
 - 👉 「なぜなれば」 > 「なぜならば」 > 「なぜなら」については小林(1996)の示す過程に沿う。

👉 以下、特に、ナリ型の成立と「なぜなら」型の接続詞の成立過程について考える。

2.3 ナリ型の成立

👉 抄物のナリ型についての素朴な観察

- 🌀 同じナリ型の中で、疑問文の述語が動詞・形容詞になるか(ナゼニ…ゾ)、不定語になるか(…ハナゼニ)という観点から見たとき、応永本論語抄には、動詞・形容詞述語の場合には「Wh…ナレバ」「Wh…発話動詞」の両方があるが、不定語を

- 述部とする場合にはナリ型がなく、発話動詞型の「…Wh 発話動詞」の例しかない。
- また、後期抄物ではナリ型が優勢になるとともに、「…Wh ナレバ」の例も増えていく。

表2 抄物のトナリ型・発話動詞型・ナリ型

	トナリ型		発話動詞型		ナリ型	
	Wh…	…Wh	Wh…	…Wh	Wh…	…Wh
応永本論語抄			14	5	2	
史記抄	12	3	42	66	20	5
蒙求抄			7	5	9	3
中華若木詩抄			4		3	2
毛詩抄	(3)	(1)	54	30	193	50
四河入海	3	4	376	412	50	187
三体詩素隠抄	4	1	20	78	12	20
玉塵抄			15	2	1	8
参考：論語聴塵		1	15	3	1	
蒙求聴塵			7		2	1

- このこと（主に応永本論語抄に「…Wh ナレバ」がないこと）の解釈は以下の2通り。当期には「…Wh ナレバ」型の疑問文があるため1の解釈も成り立つが、大木（1969）や矢毛（1999）の示す、中世前期の「文相当句を承けるナレバ・ナレドモ」の前接句の偏りは、2を支持するように思う。
 - 数が少なく、たまたま資料に現れていないだけ。
 - 「Wh…ナレバ」が先行し、「…Wh ナレバ」が後発的である。
 - ここでは、「Wh…ナレバ」が「…Wh ナレバ」に先行して成立した可能性について考える。
 - すなわち、ナリ型が単に既存のトナリ型・発話動詞型を引き継いだものとは見ないので、トナレバのトが脱落したというような見方（清水1995など）はしない。
 - 北崎（2022）では、中世前期の「文相当句を承けるナレバ・ナレドモ」（矢毛1999）が、既存の従属節では埋め込むことのできない節の関係付けの機能を補うものと位置付けた。
 - トナリ型・発話動詞型は引用構文の一環であり、文字通りには、「（聞き手が）「なぜ？」」といえ、答えは（話し手が）「…である」という擬似的なターンテイキングが行われ、それが定型化したものと考えられる。
 - 一方のナリ型は、あくまでも文を承げるだけでターンテイキングが行われるのではなく、動詞・形容詞述語文を承けるナレバの延長上にあると考えると、「Wh…ナレバ」が先行するものとする見方について、一応の説明がつく。
 - その後、同じ不定語疑問文である「…Wh」疑問文にもナリ型が波及したものとする。
- (15) a. この盃をば先少将にとらせたけれども、親より先にはよものみ給はじなれば、

重盛まづ取あげて少将にさゝむ。 (覚一本平家物語・無文・矢毛 1999: 32)

b. 季春が頸を切りて、はやくぞ国司の心はしづまり給はむなれば、われは知らず顔にて、季春が一向とがになして、切りて、身を安くし給ふべし。 (十訓抄・第10-74・30-十訓 1252_10074,4250)

(16) a. 童は見忘れたれども、僧都は争で忘るべきなれば、「是こそそよ」といひもあへず、手にもてる物を投げ捨てて、いさごの上に倒れふす。(高野本平家物語・有王・30-平家 1250_03008,13640)

b. 童は見忘れたれども、俊寛は何故に忘れうぞなれば <vafureôzo nareba>, これこそそよと言ひも敢えず、手に持った物を投げ捨てて、砂子の上に倒れ伏された。(天草版平家物語・巻1-12・40-天平 1592_01012,13260)

2.4 接続詞「なぜなら」とナリ型の衰退

☺ 接続詞化するための前提として、「その理由は」のような主題の明示の有無に注目する。抄物の段階で既に、理由を問う場合には主題化が行われない例が多い。

(17) a. 三人と云は誰ぞなれば、夏桀一人と唐虞の子孫とぞ。(毛詩抄・巻20・4-451-5)

b. サテ比ロハ、イツゾナレバ、寒食ノ時節ソ。東風ニ吹立ラレテ。宮前ノ御柳ホ。斜メカタニ。ヒラリ。サラリトシテ。タヲヤカテ。一入見事ナソ。(三体詩素隠抄・巻1・52オ9)

c. [憂我父母...] 夫を父母と云はなぜになれば、父のごとくにたつとび、母の如くにしたしむ程に云ぞ。(毛詩抄・巻9・2-323-9)

☺ 主題化のない例が「なぜに」に偏るのは、他の不定語疑問文の回答が語彙的な項目によって満たされるのに対して、理由を問う疑問文の場合は文レベルの内容を承けることによるか。

◎ 一文にまとめようとする構造が複雑になるため、一旦切って前の文を承ける形を取りやすい？

◎ 理由を問う疑問文が他の不定語疑問文と異なる性質を持つことについては Rizzi (2001)、金水 (2012) など参照。

(18) a. あなたが生まれたのはどこですか？ 埼玉県です。

b. なぜこういう発表をしようと思ったんですか？ 前から気になっていたからです。／?? 興味です。

☺ Wh 疑問文全体の近世以降の流れにおけるゾの脱落とカの付加 (外山 1957 など)、条件表現側における已然形+バの仮定条件化が、何か関与した可能性はあるだろうか？という観点から、いくつか思いつきを。

◎ 以下の議論は、Why だけは元々述語用法の用意があり、例外的にゾがない (~はいかに。) のが一般的であったということ (于 1999) を前提とする。

4 例えば毛詩抄の場合、主題化のある例が2例のみであるのに対し、主題化のない「なぜになれば」が27例。

可能性 1

- ◎ 一般的な不定語疑問文でゾが脱落するようになり、仮にこの構文もその流れに沿った場合、疑問の焦点が曖昧になるという問題が生ずるので、それを避けた。

- (19) a. ソコヲハカラウ尉ノ官ノ者がハラタツテ、タレナレハ夜ルトヲルソト云タソ (玉塵抄・巻 35・NDL コマ 40 左 2)
- b. 「してそなたはいかやうな人なれば、りふじんな事あそばすぞ (虎明本・禁野・40- 虎明 1642_02021,16640)
- (20) a. どこなら [≒だったら] 楽しんでもらえそうですか?
- b.* なぜなら許してもらえるんですか?
- c. どんな理由なら許してもらえるんですか?

可能性 2

- ◎ Wh ゾ・Wh カの不定の用法が一般的になると、ゾ・カがある場合に、「なぜ」以外の不定語 (≒マルチプル・チョイス式疑問文) が不定+仮定条件の読みを持ってしまいうため、それを避けた。

2.5 ここまでまとめ

- ◎ 不定項を話し手自身が説明する表現は、漢文訓読文において成立し、抄物のような講義の場で盛んに用いられた。
- ◎ 発話動詞型・ナリ型として定着し、ナリ型においては「なぜなら」型の接続詞を生む。この不均衡は理由を問う疑問文の特異さに起因する。
- ◎ 次節では、このことと密接に関連する「(結果) は (原因) からだ」型のコピュラ文について扱う。

3 「(結果) は (原因) からだ」型の発達

3.1 問題の所在

- ◎ 原因・理由文は、「結果」の部分を主題化して、原因を述部で述べる文へと派生させることができる (前田 2009 の「述語用法」)。
 - ◎ 現代語の「からだ」の成立について、近世には「～からのことだ」ばかりで (湯澤 1954)、近代に「～からだ」が発達するという指摘があり (上野 2005)、これは、歴史的に見ても述語用法が派生的であることを示唆するものである (カラが原因を表し始めるのは室町以降。湯澤 1929)。
- (21) a. (原因) 髪を乾かさずに寝たから、(結果) 風邪を引いた。
- b. (結果) 風邪を引いたのは、(原因) 髪を乾かさずに寝たからだ。

- ◎ この「述語用法」は原因・理由表現とコピュラ文の 2 つの側面を持つ。特に已然形バ+ナリについては大坪 (1982) による記述があり、その他、原因・理由とコピュラ文のそれぞれの観点から、いくつかの重要な指摘がある。

- ◎ 已然形バ+ナリについて、

✎ 築島 (1963): 「…テナリ」「…ナレバナリ」「…ト…トナリ」のような「廣義

の連用修飾格乃至は接續格を受ける「ナリ」の例が訓読文に多いこと、「「ばなりけり」の例は和歌にもあるが、それは「けり」を伴つてゐる」ことの指摘 (p.682)。

- 🔸 これに対して大坪 (1982) は、「散文の場合にバナリ、バナリケリ・バナメリ・バナルベシ、コソの介入、バゾ・バゾカシなどの例がある一方で、訓読文にはバナリ (終止) の例しかなく、「和歌ほど単調でないにしても、やはり変化に乏しく、表現が貧しい」とした上で、バナリが「和文を中心として、和歌にも訓読文にも用ゐられる共通語」であり、訓点特有語であるとする築島 (1963) の見解を否定する。

🌀 他の原因・理由を表す形式について、

- 🔸 タメには、訓読文にのみ原因の意が認められ、また、「タメナリ」といふやうな形は、和文の類には見出されないものである」(築島 1963 : 373,376、吉田 2011 も参照)
- 🔸 そのタメは、「無標形によって既実現している事態を表し、タメニ節と主節の時間関係を [先-後] として〈原因〉を表している」(吉田 2011 : 101)

🌀 コピュラ文の側から、

- 🔸 ナリは「一事態性制約」を持ち、「洪水になったのは、上流で大雨が降ったのだ」のように相互に遠く離れた外形的・現象的な事態が、ナリ文で結ばれるというケースは、中古ナリではなかなか見出しにくい」(野村 2015 : 45、野村 2019 も参照)。
- 🔸 「理由 (原因) + 帰結 (結果) ナリ」のかたちで理由句を含んでいるものは多い」(野村 2015 : 48) とするが、「[野村 (2015) では、] 二事態にわたる「結果 (事実) — 原因 (事情) ナリ」型の事情文はほとんど存在しない」という。数例は見られるとして挙げられている例はナリケリとニヤの例であり、助辞の付かない終止形終止の連体ナリ文には確認できないようである。」(勝又 2021 : 75)
- 🔸 また、連体形ゾについて、「連体形+ゾ」文にも「…であるのは…からだ」という文構造で述部が原因理由を表す例はあるが、以下のように結果と原因に時間的な重なりがある」(勝又 2021 : 75) ことを指摘。

- 👉 已然形バ・タメ・ユエ…との承接のレベルで考えるのではなく、「結果を主題化して、理由を述べる構文」の歴史としてこの現象を捉え直してみる。

3.2 用例概観

- 👉 以下の組み合わせを調査する。

- 🌀 原因・理由側：ユエ、タメ、已然形+バ、ニヨリテ、……
- 🌀 コピュラ側：ゾ、ナリ

3.2.1 上代

- 👉 上代では、ユエゾ・ユエナリが述語となる例はない。

- 🌀 「～からだ」で訳せそうなものはミ語法か、「～は～とそ」文。特に後者をどう位

置づけるかは問題だが、少なくとも、「(何らかの) 原因・理由形式が、コピュラ文による述語用法を持つ」という状況ではない。

- (22) a. 今朝の朝明秋風寒し遠つ人雁が来鳴かむ時近みかも〈等伎知可美香物〉(万葉集・巻17・3947・10-万葉0759_00017,15450)
- b. 言問はぬ木すら春咲き秋付けば黄葉散らくは常をなみこそ〈常乎奈美許曾〉(万葉集・巻19・4161・10-万葉0759_00019,9790)
- c. 佐保過ぎて奈良の手向に置く幣は妹を目離れず相見しめとそ〈相見染跡衣〉(万葉集・巻3・300・10-万葉0759_00003,21230)

3.2.2 中古和文

👉 中古和文には、已然形バ+ナリの例はあるものの(田島1964の「根拠を示す語に直かに接する形」)、ナリで文終止する例が、落窪の2例と、うつほ・狭衣・栄花下巻(中世的現象と見る)の例のみで僅少。連体ナリ(終止)は普通にあるので、これはナリ単体に帰着される問題ではない。

- (23) 女君、「いとけしからず。<いな>と思さば、おいらかにこそけしきばめ。本意なく、<いかにいみじ>と思へばなり」とのたまふ。少将、「かの北の方に、<いかでねたき目見せむ>と思へばなり」とのたまへば、女君、「これはや忘れたまひね。かの君や憎かりし」とのたまへば、…(落窪物語・巻2・20-落窪0986_00002,98560)

👉 ナリで終止しない例は大坪(1982)の指摘の通り、一定数見られる。

- 🕒 単に「和文が広く、訓読文が狭い」ならば、バナリ(終止)がもっと見られてよいはずだし、ナリに接続し得る他の形式(ム系など)もあってよいはず⁵。
- 🕒 この環境においてのみ、バナリの承接が許容されていると考える。この点については後述。

- (24) a. みやこへと思ふをものかなしきはかへらぬ人のあればなりけり(土左日記・20-土佐0934_00001,9470)
- b. あかでのみ経ればなるべしあはぬ夜もあふ夜も人をあはれとぞ思ふ(大和物語・20-大和0951_00001,222270)
- c. よひみになりて、めづらしき文こまやかにてあり。…あさましきことと目慣れにたれば、いふかひなくて、なにごころなきさまにもてなすも、わびぬればなめりかしと、かつ思へば、いみじうなむ、あはれに、ありしよりけに急ぐ。(蜻蛉日記・下・20-蜻蛉0974_00010,37940)
- d. 人げなくおぼえなどせしかば、いかにせましと思ふ折々もあれど、古めかしき心なればにや、聞こえ絶えむことのいとあはれにおぼえて。(和泉式部日記・20-和泉1010_00001,116310)

表3 中古・中世前期の已バナナリ

終止	べし	めり	けり	や	こそ	計
----	----	----	----	---	----	---

5 ただし後撰集に1例、バナラムがある。

古今						2
土左					2	3
大和					1	3
蜻蛉					5	9
落窪	2				2	7
枕					9	9
源氏			4		36	41
紫					2	2
和泉					4	4
堤中					1	4
大鏡					13	16
讃岐					3	4
今昔	11				3	21
宇治					1	1
十訓					3	3
保元					5	5
平治					1	1
平家					9	9
十六					1	1
とは					5	5
徒然	4				1	5

ユエナリ、タメナリはなく（そもそも原因のタメがない）、已バと同様、ユエナリケリはある⁶。

- (25) a. 早うより御祈祷の師にて、物の怪など払ひ棄てける律師、山籠りして里に出てじと誓ひたるを、麓近くて、請じおろしたまふゆゑなりけり。(源氏・夕霧・20-源氏 1010_00039,4630)
- b. 今日わざとの文人も召さず、ただその才かしこしと聞こえたる学生十人を召す。式部の省の試みの題をなずらへて、御題賜ふ。大殿の太郎君の試み賜りたまふべきゆゑなめり。(源氏・少女・20-源氏 1010_00021,198160)

3.2.3 中古漢文訓読文

タメ(二)・ユエニ・ニヨリテ・モチテや、それが直訳により複合した形において、述語用法が広く見られる。

6 ユエの意とされる「ケ」の扱いに困る。

古語大鑑第2巻、「け」(故)の項、「平安時代の確かな漢字書きの例は見られず、語源については未詳である。「故」は宛字。「気(け)」の可能性も残り、古く撥音韻尾は無表記されたところから「験」の可能性も考えられる。今昔物語集では「気」「験」と表記した例もあり、古本説話集では今昔物語集と同話の例が「しるし」と表記されている例が見え、平安時代末期には「気」、又「験」とする語源解釈があったことは確かである。」

- ・ 道々の物の上手ども多かるころほひ、くはしうしろしめし調へさせたまへるけなり。(源氏・花宴・20-源氏 1010_00008,32440) …大島本「給へるけなり」、河内本では「給へりけるとなんみ給へし」
- ・ 天変頻りにさとし、世の中静かならぬはこのけなり。(源氏・薄雲・20-源氏 1010_00019,90860) …「このけなり」、河内本では「このゆへなり」(言えるんかい)

◎ なお、「タメニ（為）の叙述形タメニナリ」は、「故字よりも表れる度数が少ないが、殆ど亦タメニナリといふ形である」（春日 1942：274）。この時期には、目的は～ムタメニ、原因は～タメニで分担がある（吉田 2011）。

- (26) a. 所以者何 此方便をもちて一切作意の修（する）所の諸行速く成満するに由（る）が故。依止自在修（も）亦三種有（り）。謂（く）身自在（の）故。行自在（の）故。説自在（の）故^ソ。（聖語藏本大乘阿毘達磨雜集論 [800 頃] 15 下 7）
- b. 即（ち）小乗・外道の邪智・我と法とを執するが故（に）示（し）て知（ら）令（め）むが故なり。故（に）天親の論を造（る）ことは有情を（し）て正智を生じ空を達し理を証せ令（め）むが故なりといふことを知（る）。（即小乗外道邪智執我法故示令知故 故知天親造論令有情生正智達空証理故）（百法顯幽抄古点 [900 頃] 1708）
- c. 彼ノ人王ニ於テ、我が当ニ護念セムコトハ、復無量ノ福德ノ利ヲ見ルガ故ニナリ⁷（金光明最勝王經注釈古点・巻 6・春日 1942：53）
- (27) a. [由] 彼の有情の安楽なることは故^{なほ}し [イ安楽ナル故ハ] 常に瞻部洲に流通すること得ルに由^{ユエ}りてなり。 (由彼有情安楽故 常得流通瞻部洲)（金光明最勝王經古点・巻 6-12・115-23）⁸
- b. 何以故、是等の如キ不可思議の殊勝の功德ありて一切を利益するを以（て）なり。 (何以故以如是等不可思議殊勝功德利益一切)（金光明最勝王經古点・巻 6-12・109-21）
- c. 直関山（ヲ）隔テ、果遂能不ルカ為^{なり}なり。 (慈恩伝第 7 承德頃点第 9-359・築島 1963：376)

🟡 已然形バナリの例も、ある（ただし、上の例と比べて多くはない）。文末の「故」「為」「為故」字を訓読することで生まれたユエナリ類があることを基盤として、故字・為字などのない理由説明の文型（→前節）においても、已バを使う「已バナリ」が使えたものとする。

- (28) a. 両足の中の尊として空寂に住（し）たまひたることは [イたまひタリ。] 聲聞の弟子も身亦空ナレバなり [イ聲聞ノ弟子ハ身も亦空ナリ。]（両足中尊住空寂 聲聞弟子身亦空）（金光明最勝王經古点・巻 10-29 [830 頃] 202-16）
- b. 疾（く）すべき所以は [者]、是れ有爲の法にして、信（す）可（くあら）不。多く留難（の）起（こ）ること有ればなり。 (所以疾者、是有為法、不可信。多有留難起。)（石山寺本大智度論・巻 19-16 [858] 686・大坪 1981：811）⁹
- c. 故（に）其の宗を異にすと名（づく）ることは [者] 中道の宗に異なればなり [也]。 (故名異其宗者異中道宗也)（百法顯幽抄古点 [900 頃] 1493）
- d. 我レ仏子等の…仏の所に来至セルことは、曾し諸仏に従（ひ）たてまつりて方便の所説の法を聞ケレバナリと見て、(妙法蓮華經初期末点・大坪 1981：811)

7 「ユエニといふ接続詞は、これは副詞であるから、叙述には形容動詞形を取つて、ユエナリとなるのが妥当であるが、この古点には殆どすべてユエニナリと訓まれてゐる。」（春日 1942：274）

8 「以字は「用也」「由也」といふ訓のあるやうに、故字と同義となつて、原因を表す接続詞となる。…この用法は原因・結果の倒置された場合に最も明かに知られる。」（春日 1942：187）

9 「訓読文では、原文の「也」を読む他、文意によつて補読し、体言、活用語の連体形その他、種々な語につく」（大坪 1981）として、「活用語の已然形+接続助詞バ」の例も挙げる。

- e. 真性真空、極(メ)テ方外(ノ)[之]外ニ踰(エ)タリ、有ヲ以テ取レハ(ナリ)[也]
(真性真空極踰方外之外以有取也)(慈恩伝古点・巻8-217 [1100頃])

3.2.4 中世前期・和漢混淆文

👉 和漢混淆文では、已バナリが大鏡・今昔などに見られる。

- (29) a. また、無下のよしなしごとにはべれど、人のかどかどしく、魂あることの興ありて、優におぼえはべりしかばなり。(大鏡・人・20-大鏡1100_02011,105940)
b. 亦、太子ニ三ノ名在ス。一ハ厩戸ノ皇子、厩ノ戸辺ニシテ生レ給ヘバト也。ニハ八耳ノ皇子、数人ノ一度ニ申ス事善ク聞テ一言モ不漏載リ給ヘレバ也。三ハ聖徳太子、教ヲ弘メ人ヲ度シ給ヘレバ也。(今昔物語集・巻11-1・30-今昔1100_11001,42160)
c. 陰陽師ノ云ク、「今ハ更ニ怖レ不可給。宣フ事ノ難去ケレバ也」トナム云ケル。(今昔物語集・巻24-20・30-今昔1100_24020,9840)
d. 御輿共ハ冷泉ノ大納言隆房卿ノ北方ゾ沙汰シ被進ケル。是ハ女院ノ御妹ニテマシノケレバナリ。(延慶本平家物語・六末・465-2)

👉 タメナリ・ユエナリ・ニヨリテナリの例もある。

- (30) a. 此レヲ思フニ、菩薩ハ血肉ヲ具シ給ハズ。豈ニ痛ミ給フ所有ラムヤ。而ルニ、只此レ凡夫ノ為ニ示シ給フ所也。「盗人ニ重罪ヲ令犯ジ」ト思ヒ給フ為也。(今昔物語集・巻17-35・30-今昔1100_17035,3200)
b. 「誠に御恩をもって、しばしの命もいき候はんずる事は、しかるべう候へども、命の惜しう候も、父を今一度見ばやと思ふためなり」。(高野本平家物語・少将乞請・30-平家1250_02005,25570)
c. 今、国ニ災ノ発ル事ハ、隣国ノ客神ヲ国内ニ置ケル故也。(今昔物語集・巻11-23・30-今昔1100_11023,5720)
d. 此ノ過ヌル夜、人ノ夢ニ然々見ケルニ依テ也 (今昔物語集・巻19-11・30-今昔1100_19011,5540)

3.3 調査のまとめと分析

👉 ざっくりまとめ、

- 🌀 中古和文では已バナリ(終止)は活発ではなく、環境が限定される。
- 🌀 漢文訓読文にはバだけでなく、タメ・ユエ・ヲモチテなどの述語用法があり、
- 🌀 和漢混淆文は漢文訓読文のそれを引き継いだものと見られる。

👉 中古和文の「[理由]ナリ。」が僅少であることについて、

- 🌀 「和文でもできなかったわけではないが、訓読文が定着を促進した」と考える。
 - 👉 大坪(1969,1981)の「提示語法」(左方転移構文)は、「本来の国語にもあった」という点でよく似る。

10 「バトナリ」はCHJにはこの1例しかなく、よく分からない。

- ◎ 中古和文の場合、已バナリは、ベシ・メリ・ケリ・ヤが後続する場合に限定される。これは、「中古中期の段階では、理由の表現が事情を表すような事情文は重複を含んだ「理由句+帰結句ナリ」に制約されている」（野村 2015:50）ことの現れ？
 - ✎ この制約が漢文訓読において緩み、それを和漢混淆文が引き継いだものと考ええる。

➡ その後の展開。既に体系内に述語用法がある場合に、もう一度同じ手順を踏んで述語用法を派生するのかどうかは不明。

- (31) a. 前二次ツル故ハ、季 - 氏カ悪事ヲスルハ仁ニ近 (ママ) サルニ依テ也。善ニアヘハヨクナリ、悪ニアヘハ悪クナル故ニ、イツモ可居処ヲ慎テ仁者ノ里ニ居ヘキ也。
(応永本論語抄・185-4)
- b. 君子ニハ奉公シヤスシ。忠恕アリテ思ヤリアルホドニ也。(応永本論語抄・545-7)
- c. 十乗ハ四十匹也。一車〈ニ〉四馬ヲカクルホトニソ。(応永本論語抄・246-8)
- d. ナセニ黄帝カラシテ三皇ヲハ不記ソト云ヘハ、上ハ洪荒テ不知ソ。何事モ黄帝カラ始タト云ホトニソ。(史記桃源抄・索隱序・1-36-14)

4 その他、気になっていること

4.1 文の接続による根拠の消極的な表示

- ➡ 行為指示の述部と、その行為指示の根拠との位置の関係性のパターン化。北崎 (2022) でちょっと書いたけど、ちゃんとできてないのでやりたい。
- (32) a. 「さらばいかがはせむ。とく返りたまへ。遅くはえしも対面せじ」とて、(平中物語・20- 平中 0960_00001,216660)
- b. 「内々申上うとぞんずる所で御ざつたに、かたじけなふ御ざる、いたしまらせう、おしへてくだされひ (虎明本狂言集・八句連歌・40- 虎明 1642_07025,8790)
- (33) a. 「今から何もかはふ程におまきやれ (虎明本狂言集・鷹盗人・40- 虎明 1642_02003,4380)
- b. 「さあらばこなたの拍子にかかつて、さいほうが、まごぢやくしの、名をば何といふやらんと仰られひ、こたへませう程に (虎明本・財宝・40- 虎明 1642_01022,12500)

4.2 理由節のノ疑問文への埋め込み

- ➡ 「Wh ならば」を探していて思ったが、こういう例は現代共通語ではテ節で表す方が一般的？
- (34) a. ソコヲハカラウ尉ノ官ノ者ガハラタツテ、タレナレハ夜ルトヲルソト云タソ (玉塵抄・巻 35・NDL コマ 40 左 2)
- a'.^{??} あなたはどういう人 {なので/だから} ここへのぼった (という) んですか？
- b. 「してそなたはいかやうな人なれば、りふじんな事あそばすぞ (虎明本・禁野・40- 虎明 1642_02021,16640)
- (35) a. 来ぬ人を待つ夕暮の秋風はいかに吹けばかわびしかるらむ (古今和歌集・777・20- 古今 0906_00016,10240)

(新全集訳：来てくれない人を待っている夕暮時の秋風は、どういうふうにかいて、私を心細くさせるのだろうか。)

b. 「いかなる心地したまへば、かくはしたまふぞ」といひて、かき抱きてなむ寝にける。(大和物語・20-大和0951_00001,315820)

c. 「汝ぢ、何ノ恥ノ有レバ形ヲバ可隠キゾ」(今昔物語集・巻11-3・30-今昔1100_11003,4610)

(新全集訳：お前はいったい何の恥じることがあって姿を隠すのか)

5 おわりに

- 🟡 文法史研究が口語資料をありがたがるのは勿論、そういった場で言語変化が起こりやすいという経験的な知見に基づいている。
- 🟡 一方、大坪(1982:137)には「まづ事実を述べ、後からその理由はかうだと説明する構文は、いはば理屈っぽい表現であつて、日本人好みではないため、国語本来のものではなく、漢文訓読の際に派生した翻訳文法ではないかとも考えられる」とあり、(大坪は直後にこの見解を否定するのだが) こうした「理屈っぽい表現」は、口頭語で用いられるとしても、必ずしも「くだけた口語」で発達するものと見なくてもよいはず。
- 🟡 そんなことを考えながら、科研「諸変異を包括する日本語文法史研究の新展開—文体・方言・文章ジャンル—」(基盤B) 出しました。
- 🌀 もし採択されたら、科研研究会にスライドしましょう。

参考文献

- Rizzi, Luigi. 2001. On the Position “Int(errogative)” in the Left Periphery of the Clause
Guglielmo Cinque and Giampaolo Salvi (eds.) *Current Studies in Italian Syntax* Brill. 287-296.
- 安部朋世(2011)「ムシロ・ドチラカトイエバ・カエツテの分析」『千葉大学教育学部研究紀要』59, pp.241-245.
- 于康(1999)「「いかに」の述語用法」『国語国文』65(11), pp.1-19.
- 大江元貴・居關友里子・鈴木彩香(2020)「日本語の左方転位構文はいつ、どのように使われるか?」『社会言語科学』23(1), pp.226-241.
- 大木正義(1969)「「なれば」「なれど(も)」の構文論的機能について—発生期のそれ—」『国文学言語と文芸』63, pp.59-68.
- 大坪併治(1981)『平安時代における訓点語の文法』風間書房.
- 大坪併治(1982)「原因・理由を表はす文末のバナリについて」『訓点語と訓点資料』67, pp.123-138.
- 春日政治(1942)『西大寺本金光明最勝王經古点の国語学的研究 研究篇』岩波書店.
- 勝又隆(2021)「中古散文における「連体形+ゾ」文の用法—ノダ文・連体ナリ文との共通点と相違点—」筑紫日本語研究会(編)『筑紫語学論叢Ⅲ日本語の構造と変化』風間書房, pp.54-82.
- 北崎勇帆(2022)「原因・理由と話者の判断」青木博史・小柳智一・吉田永弘(編)『日本語文法史研究6』ひつじ書房.
- 金水敏(2012)「理由の疑問詞疑問文とスコープ表示について」近代語学会(編)『近代語研究16』武蔵野書院, pp.349-367.
- 小林賢次(1979)「中世の仮定表現に関する一考察—ナラバの発達をめぐって—」中田祝夫博士功績記念

- 国語学論集刊行会（編）『中田祝夫博士功績記念国語学論集』勉誠社，pp.297-322.
- 小林賢次（1992）「原因・理由を表す接続助詞—分布と史的変遷—」『日本語学』11(6)，pp.131-141.
- 小林賢次（1996）『日本語条件表現史の研究』ひつじ書房.
- 清水登（1995）「院政期から室町期までの接続表現について—ナラバ・タラバ・ナレバを中心として—」
近代語研究会（編）『日本近代語研究 2』ひつじ書房，pp.281-305.
- 高橋淑郎（1999）「自問自答形式の疑問表現」の性格」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』12，
pp.55-76.
- 田島光平（1964）「連体形承接の「なり」について—竹取物語を中心に—」『国語学』56，pp.12-21.
- 築島裕（1963）『平安時代の漢文訓読語につきての研究』東京大学出版会.
- 辻本桜介（2017）「文相当句を受けるトナリについて—中古語を中心として—」『ことばとくらし』29，
pp.3-19.
- 外山映次（1957）「質問表現における文末助詞ゾについて—近世初期京阪語を資料として—」『国語学』
31，pp.37-46.
- 永野賢（1952）「から」と「ので」とはどう違うか」『国語と国文学』29(2)，pp.30-41.
- 野村剛史（2015）「中古の連体形ナリ—『源氏物語』を中心に—」『国語国文』84(1)，pp.35-56.
- 野村剛史（2019）「ノダ文の通時態と共時態」森雄一・西村義樹・長谷川明香（編）『認知言語学を拓く』
くろしお出版，pp.285-304.
- 前田直子（2009）『日本語の複文—条件文と原因・理由文の記述的研究—』くろしお出版.
- 矢毛達之（1999）「中世前期における「文相当句＋ナレバ・ナレド（モ）」形式」『語文研究』88，
pp.32-44.
- 湯澤幸吉郎（1929）『室町時代言語の研究』大岡山書店.
- 湯澤幸吉郎（1957）『増訂 江戸言葉の研究』明治書院.
- 吉田永弘（2007a）「中世日本語の因果性接続助詞の消長—ニヨッテの接続助詞化を中心に—」青木博史（編）
『日本語の構造変化と文法化』ひつじ書房，pp.181-203.
- 吉田永弘（2011）「タメニ構文の変遷—ムの時代から無標の時代へ—」青木博史（編）『日本語文法の歴史と変化』くろしお出版，pp.89-117.

付記：本研究は科研費（20K13049）の研究成果の一部です